

学習指導要領 語と文法の改訂のポイントと 中学校補助教材『Bridge』の紹介

西垣知佳子



学習指導要領では、外国語教育のスタートが小学3年生に早期化され、5, 6年生で教科となります。これに伴い、小中高を通して児童・生徒に指導する語の数が増え、文法の一部は高校から中学校へ、中学校から小学校へと移動します。本稿では、高等学校学習指導要領（2018年告示）における語と文法について、改訂のポイントを検討し、また文部科学省が作成し、令和2年度に配布する『新学習指導要領対応 中学校外国語教材 Bridge』（以下『Bridge』）を紹介します（図1）。

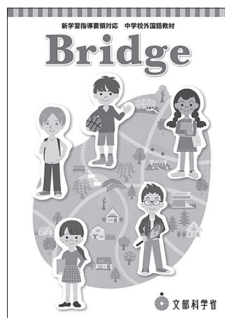


図1 『Bridge』の表紙

◆語に見る改訂のポイント

指導する語を語数の観点から見ると、今回の改訂では、小中高を通して指導する語数の合計は4,000～5,000語程度となり、その内訳は、小学校で600～700語程度、中学校で1,600～1,800語程度、高校で1,800～2,500語程度です。2009年版では中高の合計が3,000語程度だったことを考えると、大幅な語数の増加です。この語数の増大に、どのように対応したらよいでしょうか？

投野（2019）は、小中高を通して指導する

5,000語のうち2,000語は「発信語彙」、3,000語は「受容語彙」のレベルを目指すという目標を提唱しています。受容語彙とは聞いたり読んだりして意味を理解できるように指導する語彙、発信語彙とは話したり書いたりして表現できるように指導する語彙です。このような区分は、今回の改訂で初めて導入されました。語彙力は、はじめに受容語彙として身に付き、その一部が発信語彙となってアウトプットできるようになります。

2,000語という発信語彙の数は、*Longman Dictionary of Contemporary English* で、見出し語の定義に使われる The Longman Defining Vocabulary の語数の2,000語と一致しています。このことからこの語数でたいいことは、問題なく表現できることがわかります。また、前掲の投野によると発信語彙2,000語のうち、20ほどの動詞と機能語から構成される出現頻度の上位100語は、会話の60%から70%をカバーし、文の骨組みを作る際に欠かせず、2,000語の約半数は名詞です。ここから上位100語で文の骨組みを作り、主語や目的語の位置に発信語彙の約1,000語の名詞を入れて使い回せば、かなり自由に英文を産出できそうです。

ただし、小学校で指導する600～700語と、中学校で指導する1,600～1,800語の全てが、発信語彙の2,000語に含まれるわけではありません。教科書を通して学ぶ語には、扱う内容に関連するいわゆる題材語が、相当数含まれるからです。例えば、科学分野のリーディングで cortex（皮質）という語を指導しても、発信までは求めないという

ことになります。また、発信語彙の2,000語は、小学校から高校まで分散させて導入し、繰り返し使わせながら、ジワリと身に付けさせます。一度教えたからと言って、すぐに覚えて、使えようになることを児童・生徒に求めることはありません。

教科書を通して指導する5,000語を、まんべんなくギチギチ教え込む必要はなく、発信語彙と受容語彙という強弱をつけて指導することになります。ただし、発信語彙の2,000語は学習指導要領には示されていないので、教師が、児童・生徒の必要性に考慮し、見極めていくことになります。

◆文法の改訂のポイントと補助教材『Bridge』

学習指導要領の下、高校の文法では、これまで以上に、小中とのつながりを意識して、必然性のある目的や場面を設定して、習得を図ることが求められようになります。そこで、中学校と高校の接続を強固にする上で、生徒の中学校での学習履歴を確認しておくことが重要であることから、『Bridge』を取り上げて検討します。

『Bridge』は、令和3年度から全面実施される中学校学習指導要領に先駆け、令和2年度の中学1年生と2年生が、学習指導要領に追加される内容を、移行期間の令和2年度に学習できる教材です。読み物と3種類の活動がセットになっている見開き2ページの学習教材が18編と、巻末には単語リストと Sample Answers があり、文部科学省のウェブサイトからダウンロードできます。

図2は『Bridge』の一部を示しています。『Bridge』には、図2のようなウェブサイト、またSNS、電子メール、ポスター等の実生活で目にするタイプの読み物と、それに付随するCheck, Talk, Writeの活動があります。Checkには読み物の内容理解を確認させる選択式問題、TalkとWriteには思考・判断して、やり取りさせ、書かせる表現活動があります。

図2の教材の文法ターゲットは、高校から中学へと移動した〔主語＋動詞＋目的語＋原形不定



図2 『Bridge』のページ例

詞〕(The medicine lets you talk with animals.)です。これを、薬の効能を伝えるという必然性のある題材で、また生徒が興味を持ちそうな、ユーモアのある内容で、かつシンプルな読み物を使って導入し、TalkとWriteで自己表現をさせます。

『Bridge』を見ると、改訂後の高校の文法指導において強化していくポイントの1つは、生徒に意識を向けさせる文法項目と、生徒の生活や現実社会とを、どのようにして結びつけるかという「場面創造力」を高めることだとわかります。例えば、定冠詞theに意識を向けさせる場合、「相手と自分が共有している話題や情報について話そう」という場面を設定します。そして活動を通して、自分と友だちが「例のあれ」と特定できる「人・こと・もの」について話すときにtheが使えることを意識させるようにします。

このように『Bridge』は改訂のポイントをよく示しています。先生方には、中学校の外国語教科書と併せて、一度ご覧になってみてください。

◆参考文献

投野由紀夫 (2019). 『英語教育』2月号, 大修館書店.

(にしがき ちかこ・千葉大学教授)